がん社会を診る

中川　恵一

# 進行度で違う治癒率

現在、がん全体の6割近くが完治しますが、がんの治りやすさの指標である5年生存率はがんができる臓器によって大きく違ってきます。乳がん、前立腺がん、甲状腺がん、皮膚がんで9割近くになりますが、食道がん、肺がん、肝臓がんで3割程度、膵臓（すいぞう）がんでは7％にすぎません。

同じ臓器のがんでも、がんの病巣がまだ小さく、臓器にとどまっている段階なら、完治の可能性は高くなります。がんの増殖が進むと、臓器の外に出てリンパ節などへ転移します。この段階になると進行がんと呼ばれますが、まだ完治の望みはあります。しかし、他の臓器に転移してしまえば、治癒は非常に難しくなります。

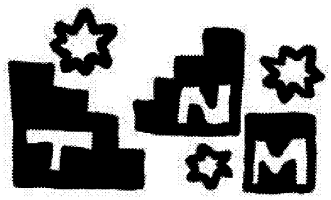
一般的にがんは、できたもとの臓器である原発巣からリンパ節へ広がり、さらに遠隔臓器へ転移します。がんの進行の度合いは、もとの臓器にあるがんの大きさ、リンパ節への転移の程度、離れた臓器への転移の有無によって表現します。それぞれの英語表記の頭文字であるT、N、Mをとってｔｎｍ分類と呼ぶ方式をもっとも使います。

一般的にはＴ１～Ｔ４と数字が大きくなるほど病巣が大きくなります。Ｎ０～Ｎ３は数字が大きくなるほど、遠くのリンパ節に転移していることを指します。Ｍ０は遠隔転移なしで、Ｍ１の遠隔転移ありと区別します。たとえばＴ２Ｎ１Ｍ０のように表記します。Ｔ１Ｎ０Ｍ０はステージ１で最も早期ですが、遠隔転移のあるＭ１となるとＴやＮの数字にかかわらず、ステージ４の進行した状態ということになります。同じ胃がんであっても、ステージ１の５年生存率は98％に達するのに対して、ステージ４では同８％で、12倍の差があります。

肺がんでもステージ１と同４の５年生存率はそれぞれ80％と５％で17倍近い差があります。ただ、肺がんの２割弱を占める小細胞性肺がんと呼ばれるがんの組織のタイプはとくに難治性で、完治は例外的になってしまいます。

同じ臓器のがんであっても、ＴＮＭ分類に基づく進行度の違いやがんの組織型によって、治療方法も治癒率も大きく変わってきます。がんと診断された際には、ＴＮＭ分類や組織型まで医師に確認しておくとよいと思います。

（東京大学病院准教授）




イラスト・中村　久美

掲載日 2015年04月26日 日本経済新聞朝刊 014ページ
(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。